

県中教研 国語部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 古木 陽子
題 字 金山 泰仁 先生

語彙指導の充実

指導主事 市村 明恵

今年度、研究大会や学校訪問研修会等の機会に生徒が主体的に学ぶ姿に多く出会いました。その中で心に残ったのは、学習課題に対して生徒同士が対話を重ねながら考えを深める場面での姿です。ペアやグループ、話を聞きたい級友同士等で、生徒が湧き上がる疑問や級友に伝えたい意見を生き生きと話し合う様子は印象的でした。中でも言葉の感じ方を伝え合う活動では、それぞれの生徒がもつ新鮮な語感が際立ちました。同趣旨の和語や漢語、外来語に対する印象の違いや、俳句に使われている助詞一つについて、自分と相手の感じ方を比較し対話しながら考えを深化させていく様子は、言葉の面白さを味わう姿そのものでした。

昨今、語彙を豊かにする指導の充実が求められています。単元での指導はもちろん、毎日の授業の中で指導を少しずつ重ねることが、生徒自身が既に構築している言葉の構造に新たな語句を関連付けて組み込み、ネットワークを広げていくことにつながります。さらに、ネットワークにある語彙を増やすだけでなく、使える言語、生きて働く知識にしていくことが望まれます。自分の気持ちを表すためにより適切な語句をじっくりと探したり、文章中に用いられた語句への理解を深めながら他の語との関係を考えて言葉を広げたりするなど、語彙という切り口で、それぞれの指導事項を結び付ける様々な実践が考えられます。

国語科では、言語活動を通して資質・能力を育成します。言語活動から見取った生徒の姿を次時に生かし、身に付けさせたい資質・能力の獲得に向けてPDCAサイクルを循環させながら指導を工夫することが大切です。言葉による見方・考え方を働かせることにより、質と量の両面で生徒が言葉のネットワークを充実させられるよう、日々の学びを支えていきたいものです。

(東部教育事務所)

授業改善への道

部長 古木 陽子

今年度も昨年度に引き続き、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語の資質・能力を育てる指導と評価はどうあればよいか。一身に付けさせたい資質・能力を明確化した授業づくりと指導に生かす評価」を研究主題として研究を進めてきました。

第69回研究大会で提案された「読むこと」の実践では、思考の流れが分かるワークシートや、考えを共有するためのICTの活用がみられ、根拠となる叙述を明確にしながら文章の説得力を高めるための工夫とその効果について、生徒が考えを深めていました。また、「話すこと・聞くこと」の実践では、「総合的な学習の時間」等と関連付けた単元構成によりインタビューの目的が明確化され、振り返りにおいては、問題解決に生きる対話の場面が設定されるなどの工夫がみられました。

さらに、富山・高岡の2地区では、授業力向上アドバイザーとして、神戸女子大学教授吉川芳則先生をお迎えし、「多面的な見方・考え方を育てる説明的文章の授業づくり－批判的読みを取り入れて－」と題してご講話をいただきました。生徒が「自立した主体」として、「自分のことばで考え、表現できること」を目指し、「批判的読み」をまずは単元の中で一回だけでも位置付けてみる大切であるとの教示を受けました。

付けたい力と学習評価の方法が適したものになっているか、付けたい力に即した指導や学びがなされているかなど、私たちが意識しなければならぬことは多くあります。「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善への道に終わりはありません。授業の主役である生徒が自ら言葉にこだわり、言葉を楽しみ、言葉を大切にしていけるよう、今後も実践を積み重ねていきます。

(富・堀川中)

第 69 回 研究

新 川 地 区

(中・雄山中)

(1) 研究授業

黒田優月教諭が、第1学年で「『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」を題材に、【『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」を読み、筆者の工夫から生まれた効果を考えよう】という単元の授業を提案した。

本時のねらいは、筆者の説明の工夫について話し合うことで、

文章の構成や展開の効果について根拠を明確にして考えることであった。生徒は、前時までに



本文中から、筆者が文章に説得力をもたせるための工夫をいくつか見つけており、本時ではその工夫の中から「グラフ」「二回の検証」「結果から考察の順序」の三つに焦点を当て、それらの効果を考えた。また、考えるための視点が絞られ、ワークシートの型も提示されたので、生徒が見通しをもって学習に取り組むことに有効であった。

(2) 研究協議

グループ協議では、「ICT機器と手書きのハイブリット授業の在り方はどうあるべきか」「型があったり視点が絞られたりすると生徒の考えも限定されるのではないかな」などの視点から意見が出された。

(3) 指導助言

鍋谷靖子主任指導主事（東部教育事務所）からは、語彙指導の重要性や指導と評価の一体化等について講話していただいた。研究授業については、実態把握に基づいた意図的指名から生徒の考えを広げ深める支援の在り方や学習の場の設定、ICTを効果的に活用し、生徒の学びにつなげるための手立て等について指導助言をいただいた。

海見 陽 (滑・早月中)

富 山 地 区

(富・八尾中)

(1) 研究授業

「批判的に読む」ことをテーマに、担当する学年ごとに分かれてグループ協議を行った。

参加者は、第3学年「複数の意見を読んで、考えよう」を扱う授業において、どのように「批判的に読む」活動を行えばよいかを検討したり、各学年の教材において「批判的に読む」ことの授業実践を紹介し合ったりすることができた。

今回の部会協議のテーマを「批判的に読む」として意見交換



したことにより、参加者は、後半の授業力向上アドバイザーである、神戸女子大学吉川芳則教授の講演内容をより主体的に、課題意識をもって聴くことができ、「批判的に読む」ことについての学びを深めることができる貴重な研修の場となった。

(2) 指導助言

市村明恵指導主事（東部教育事務所）からは、指導と評価の一体化について、指導案の内容にも触れて指導助言をいただいた。

- ・どのようなことを指導し、どのような力を身に付けさせるかを意識することが大切である。
- ・単元のねらいに即した言語活動を設定したい。今回の指導案では、単元内で本時がどのような位置付けにあるのかを押さえられていた。
- ・評価においては、1人1台端末の活用も効果的である。

また、「批判的に読む」ことの指導では、「文章の内容をそのまま受け入れず、対象化して吟味することを意識させる。決して粗探しをするものではなく、根拠に基づいて考えを導くことを大切に、多面的に捉え、本質を見抜く力を付けることを目指したい」との指導をいただいた。

恒田 浩史 (富・上滝中)

大会を終えて

高岡地区

(射・小杉南中)

(1) 研究授業

高田雅行教諭が、第2学年で伊坂幸太郎「ヒューマノイド」を教材に、「さまざまな人間関係を捉え、考えを深める」という単元の授業を提案した。学習課題「タクジが理想とするヒューマノイドはどのようなものか考えよう」の下、生徒たちは過去と現在につ



いての叙述に注目し、個人で意見をまとめた後、班や全体で共有した。個人の意見と友達の意見をワークシートに色分けさせたことは、学びの軌跡を可視化し、協働的に学ぶことの価値に気付かせる上で有効であった。

(2) 研究協議

グループ協議では、話し合いを深める場にするための教師側の手立てや、意見を広げるような振り返り等が話題になった。生徒は、過去と現在の叙述をつなげて考えることができていたが、同じ叙述に注目しても、生徒の考え方に違いがあったことについて、その理由を吟味させる補助発問があると、より課題の追究が深まったのではないかという意見が出た。

(3) 指導助言

大道正敬指導主事（西部教育事務所）からは、「叙述を基に考える活動が、生徒の思考に客観性と論理性をもたらしていた」と評価していただいた。また、評価規準を絞ることで、ねらいと評価がより明確になり、単元のゴールを意識しやすくなることや、学習課題を一層吟味することについて助言をいただいた。

米田 香麗（氷・西條中）

砺波地区

(小・石動中)

(1) 研究授業

西智哉教諭が、第2学年で単元「聞き上手になろうー質問で思いや考えを引き出すー」の授業を提案した。「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」をテーマとし、話し手の思いを引き出すことができるよう、動画で撮影したインタビューの様子を基にグループで話し合った。生徒の能力や予想されるつまづき等、教師の見取りを基にグループが編成されており、効果的な話し合いができるように工夫されていた。また、本時の振り返りを基に、再度インタビューを行うという学習過程が組まれており、生徒は次時の学習に向けて見通しと目標をもち、意欲を高めていた。



(2) 研究協議

グループ協議では、「話したくなる、聞き出しなくなる場の設定」「生徒が主体的に動く授業の中での教師の出番」「学びを深める振り返りの在り方」について意見が出された。

(3) 指導助言

上田智代子主任指導主事（西部教育事務所）からは、「研究主題との関連」「身に付けさせたい資質・能力に向かうための手立て」について指導助言をいただいた。本時については、

- ・「どうすれば相手の思いを引き出すことができるか」を考えることは、言葉に対する意識を高めることにつながる。
- ・他教科や領域とも関連付けて、必要感ある学習活動を設定することが必要である。
- ・指導事項に照らして、どのようなインタビューを目指すべきか、生徒全員が意識できるように指導しておくことが重要である。

などの助言をいただいた。

今井 恭平（砺・庄川中）

多面的な見方・考え方を育てる説明的文章の授業づくり

－ 批判的読みを取り入れて －

神戸女子大学 教育学部教育学科 教授 吉川 芳則

1 説明的文章の授業の目的

説明的文章を読むときに目指すことは、自立して読める生徒を育成することである。文章を要約したり、構成を確認したりすることは、全て自立した読者になるための手段や方法である。授業の最終目的は、根拠や理由を示し、論理的に自分の意見を述べることをできる生徒を育成することである。



2 批判的思考力と論理的思考力

批判的思考力とは、次の三つの力を指している。

一つ目は、多面的に考え、本質を見抜く力である。物事を決定するときに、その一面だけを見て判断してしまうと、現代の情報社会では危険である。いろいろな角度から見て、そのものの本当の姿を見出せるようにならなくてはならない。

二つ目は、見かけに惑わされずに、一定の基準や尺度に基づいて吟味し判断する力である。物事の是非を考えると、雰囲気や感覚だけで不用意に判断していることが多い。自分の尺度をしっかりともち、その観点から物事の是非を述べられるということが大切である。

三つ目は、根拠に基づいて、自分が考えたことの理由をきちんと主張する力である。これができなければ批判的思考はできず、ただの粗探しになってしまう。

また、論理的思考力とは、比較、類別(分類)、順序、原因・理由をもとに、推理したり推論したりする力のことである。論理的に思考することは、筋道を立てて文章を読み解いていくことであり、批判的思考力と互いに補完し合う関係である。

説明的文章の授業では、内容の確認読みを基本

としながら、適宜、批判的読みを取り入れることで、批判的思考力と論理的思考力を育てることができる。

3 批判的読みの授業の実際「モアイは語る－地球の未来－」を例にして

どのような教材にも、書き手の意図がある。その意図のありようについて、根拠を基に述べることができる生徒を育成したい。

〈教科書の表現の是非〉

例 「森林の枯渇」という表現について、「なくなった」の方がわかりやすいのに、なぜ「枯渇」という言葉を選択したのか、どちらの方が適切かを考える。

〈非連続テキストの評価〉

例 写真は必要か、必要だとするならば、この写真でよいのか、写真の枚数は適正なのかを考える。

〈題名の語順〉

例 題名と副題を逆にするとイメージが変わる。このことが、本文を読むうえでどのように作用するのかを考える。

〈類似文章との比較〉

例 小学校六年生で学習する「イースター島にはなぜ森林がないのか」を副教材として与えて比較する。この文章には、ラットがヤシの森を食べつくしたと書かれているが、安田氏の文章には書かれていない。その理由を考える。

日頃の授業の基本は確認読みである。その文章がどのような内容か、どのように書き表されているのかを確認することが必要である。しかし、単元の中に一箇所でも、一回でも批判的読みを位置付けることで、生徒は根拠や理由を示して自分の意見を述べる力を獲得していくのである。

今井 恭平 (砺・庄川中)